

詩集

二十歲前後

鈴木  
利郎

若い時分の書いたものは

見返すと赤面してしまう。

何と稚拙な、誤字、レベルの低さ

記憶にないのが多いが

その感性には

そんな私があったのかと疑念を抱く。

しかし、それが私であることは確実であろう。

二〇一六年七月七十二歳

腐敗者

まるで砂糖のようですね

最後の人類に役立つだろうよ

売血者がマルクス論を唱える

無脳の人々に呼びかける

自分は売血しか出来ないくせに

わたしは絞首刑に会った男です

この通り生きています 不思議でしょう

絞首台の階段が十二段しかなかったのです

ギロチン ギロチン

ガタン ゴトン

あの人がキリストという人ですか

いいえ麻薬中毒者です

あれは聖者の集いでしょう

いいえ精神病院です

牧師なんていうのはペテン師さ

フン、同類じゃないか

悲しみ

これがアヘンで

昼顔が朝早く咲きました。

これが青酸カリです

死人の唇を動くのを見ました。

いしころ

私は大地を踏んで居る

石を踏んでいる

茶色な

黒っぽい

灰色の

石 石 石

各々の石は各々異なっている

人間一人一人が異う様に

石は知っている 石の過去を

人間が過去を回想する様に

石も過去を回想する

石の過去―人間のより美しいと言う。

人間感嘆させた巖が

急流に削られ

谷川で

せせらぎを装い

キャンパーの歌声を聞いた。

何時か

清流に

濁流に流され

大川の河原に夏を迎えた。

砂利として

背中を塩で光らした

失対の労働者に運ばれ大地に散った。

きれいな石として

可愛い女の子のポケットに入り

ゴザの上に転がった。

畑の大石は

磐梯山の噴火で降って来たと言う

それも一つの石なのだ。

各々の石は各々の道を辿り来たのだ。

一つの石は一つしかないのだ

一人の人間は一人しか居ないのだ。

地獄の底まで掘り返しても

その石は一つしか無いのだ

石は人間なのだ

石には生命があるのだ

石こそ人間の以前の姿なのだ

聞きなさい

石のきこやき

石の怒りを

真の聖なる人間の姿——石

石は今日も生きています。

おりづる

あなたは黙っている

誰が行っても黙っている

そして——今日も

無言でつるを折っている

あかいつる

あおいつる

しろいつる

しろいつる

あなたは微笑みつるを折り私の前に差し出す

私がつるを黒い上衣のポケットに入れる…

あなたはえくぼを作り

微笑う……さびしいワライ

大きいボール箱に空間(すきま)なくつるが住んでる

あなたの手で折られたつるが住んで居る

何故つるをつるさないのでですか

何故舞いらせないのですか

飛ばせないのですか——羽根があるのに

あなたは黙ってつるを降り続ける

あなたの美しい手に折られ幸せなのでしょう

ボール箱の中でも不平を言わない

しかし喜びも語らない

理想をおろうと

ゆうべ見た夢を折ろうとする

しかし、あなたはつるしか折らない

……つるしかおらない

あなたは

つるを折り続ける

嘲笑

笑っている

嘲笑っている

俺の行く手を嘲笑いが遮る

笑っている

俺の背を指し

嘲笑っている

全ての人が笑っている

私がいろいろがみを持って行くと

あなたは微笑み

いろいろがみを胸に抱き

目を瞪り

いろいろがみに

過去の楽しかった思い出を描き

あのままで笑っている

俺が何をしたのだ——何をしたと言うのだ

あ、まだ笑っている

全てが全身に

嘲笑いを浴びせる

硫酸のシャワーを浴びせる

溶鉢のシャワーを浴びせる

笑っている

笑っている

### 夜の汽車

汽車

それは連続するボックスの進行

黄色っぽい光を放つ天井の電灯

居眠りしている車内

窓に写る動かない風景

つぶされたビースの空き箱

牛乳瓶のかけらの散る床

夜にひびく汽笛……

列車は夜の田園の中の駅へ

蛍光灯の不調和な光を放っている駅

一輪の花もない

そして駅員のいない……駅

ゴトゴトゴトゴト……

長方形のボックスの出發……

ゴトゴトゴト……ゴトゴト……

単調すぎる音の世界

人間の生活の様な単調な音の世界

しかし、その音だけが生きていくという

覚を与える

進行 又進行

暗闇の中へ進行

虚無の世界へ進行

## 眼

俺の眼：眼

眼

奥行きのない眼

光を反射することができないと云う・輝きのない

眼

網膜にはビルとアスファルトが平面としか映らない

遠近のない像が写るのだ

しかしはつきりと

きれいに着色され

しかしッテとヨコだけの像しか映らない

ものを写す事ができても

見ることのできない

それが俺の眼なのだ

アメーバの眼点とも違う

トンボの複眼ともちがう

一体、何の眼なのだ

多分、人間の眼に違いない

何故か

人間と云う動物のまゆ毛の下に

嵌め込まれているから

ただ、それだけで人間の眼と云う

網膜に写り

視神経を伝わり

脳を刺激する

それなのに……見ると云うことができない

風がない

## 詩

## 最後の人類

灰色……どんより……

それが今日の雲の色

ゆううつな連続

ああ 嫌だなあ

虚無の世界の自分

しかし自分はそれを望んでいる……らしい

虚無から脱出を試みたい

木々がざわめき

雲が流れるのに

どうしたわけか

俺の顔を見ないでくれ

俺の汚れたる顔を見ないでくれ

君はこう云うに決まっている

『醜い』とたった一言

それは俺の顔であり、心なのだ

俺は微笑む

君の徴症に微笑う

君はつばを吐きつけるだろう

俺は黙ってつばを受けよう

そして、そして君は俺を蹴りとばすだろう

俺は蹴られた部分をさすりはしない

俺はジーンと来る痛みを味わおう

君がいかに俺を軽蔑しよう構いやしない

君と俺とは明日には死ぬだろうから

---

その夜、君は俺を殺してしまった

A last man in the world と云う優越感を得るために

## 木蓮の花

(一)

唇のごとき厚い花びら

黒く紫に光る花びら

その花は淋しく陰のある乙女

淋しく立たずみ

淋しく静かに黙って咲き

華やかな人々に忘れられた花

接吻を求めない花

無言の花なり

寺院の傍らにさきほこる花

死人の棺をだまて見送る悪魔の花なり

---

私は叫ぶ“神秘な花と”

(二)

我愛する花は木蓮の花と呼ぶ

その花は清く、寂しい花なり

黒紫色の花びらを持ち

非情の乙女なり

何故か我をひきつけ

そして絶対にはなさない

その花は美しくあらず

しかし、しかし、醜婦にあらず

甘味な花なり―他人はそれを知らず

我だけが汁その花の美しさの秘密

その花はだまって我に云う

何故私を好むのですか

あなたは不思議な花だ

笑っちゃいけない

笑っちゃいけない

あれが我々の真の姿なのだ

笑っちゃいけない

笑うことは自己を笑う事だ

真の姿を笑っちゃいけない

我々の未来を笑っちゃいけない

純粋を笑っちゃいけない

真の美を笑っちゃいけない

心を笑っちゃいけない

心は絶対なのだ

笑っちゃいけない

あれが我々の真の姿なのだ

笑っちゃいけない

心の道を誤らせたくなば

笑わず顔をゆがめず

真の姿を見るのだ

黙

みんなが僕の領分を取っていく

みんなが僕の心を侵していく

それは僕のパンなのに

そこは僕の日陰なのに

黙っていちゃいけない

慈善家じゃないんだから

誰かが僕の本を持っていく

バイロンの詩集なんかとっくにない

僕の心は侵されていく

荒れ果てた地と

荒んだ心と

生を認めぬ灼熱

だけが僕への残されたもの……

僕は砂浜の誰かの足跡に合わせて

北の方へ足を動かした

## 闇

闇ってなんでしょうか

闇って黒い色をしています

私は闇は黄色い色をしていると信じています

九千万の人が闇は暗いと言い 私独りだけが黄色いと云います

しかし

世界人名辞典を調べると闇は黄色いと信じる人がもつ  
といえると思います

闇は何処にでもあります

闇は何時でも存在しています

ただ気がつかないだけなのです

皆さんと輝く太陽の下に 白い蛍光灯の光の下に誰

が闇の存在を信じましょうか

人類はその闇の存在を信じなければならぬ宿命にあるのです

大部分は闇の存在を信じません

大部分は自分を誤魔化しているのです

大部分は他の部分を気狂い扱います

これは原始の時代から原子力の時代まで発展も

進展もありません

又 後退もありません

原子の時代の大部分の人数は未だに闇の存在に気がつきません

他の部分は闇について語ろうとしません

語ろうとすれば鉄格子の付いた病院に入らなければならぬにです

芸術家も軍人も民主主義を語っても闇を語ろうとはしません

なおさらこの世界中で黄色い闇を語ろうとする人はありません

黄色い闇を語ろうとする者は二十世紀の矛盾した法律によって死刑と云う刑罰を受けなければならぬのです

詩想

五月の風  
こずえに歌い

我心

夕べの月を眺め

白き手

静寂の訪れを迎えん

傍観者

我為の空席

そこは傍観者の席

我は傍観者の席にて

一人

プレイを眺め

楽しく騒ぐ過知の友を眺む

私は傍観者の席にて

一人考える

思想が湧き起こり

胸が踊る

語りたい衝動にかられる

我は居なければならぬ

議論することを禁じられた

傍観者の席に

傍観者と云う寂しい席に

着席を命ぜられた我

傍観者というレッテルを貼られ

ブレイを眺める寂しき

議論できないさびしさ

一人思う

傍観者の席をされる日を

### 忘秋を

残菊咲ける

我庭に

木枯らしの宵

流れ来て

灰色濃くす

巷の空

かつて去りし

君の面

夜寒の空に

浮べ見て

一人あの日の

星探し

裸木にかゝりし

上弦に

あの日の星は

何処へぞ

尋ねし我を

自棄しても

なおも求める

我悲し

今宵窓辺に

寄りそいて

白月遠く

見つめ居て

木の実落つ如く

去りし君

云いし言葉は

ただ一つ

「嫌な気分ね…」

さよなら…」

木犀の花より

なおあわく

白月の如く

冷やかに

なお胸痛し

別離なれど

山茶花の間に

えみ見せて

白磁の面に

赤き頬

昔死にし

姉に似し

何の香ぞ

わからねど

我空虚の胸に

泉湧き

我に希望と

詩を与え

共に歌いし

山の歌

あの日あわし

悲しけり

黒き胸血を

むせび吐き

残菊の花びら

残菊の花びら

散る如く

白日淋し

晩秋に

ただ一行の

墓碑銘に

今は語らじ

思われ人

○○○○去りし 君憫し

○○○○思わむ 我悲し

「さようなら」

人生即別離

さよなら……さよなら

脱落した気分を味わせる……

ニヒルな言葉です

甘い センチメンタルな

だらしない気どった言葉です。

「さよなら」つて口に出す時の空虚なポオズ

明るく笑って

しかし泣いてるような

それがさよならの時です。

別れて行く人を恨んではいけない。

去る人を追ってはいけない。

ええ それは敗北的です

ええ それは白々しいです

惜別の情……芝居的要素を深めます

グッドバイ

アデュー

スラマトテンガル

—— スラマトジャラン

なんと浅薄なニヒリズム

「さよならだけが人生だ」

人生は別離です

さよなら

何て冷酷な

それも一つの美です。

消えてしまった××子

めをあかくしてないでいた××子  
いしをぶっつけられた××子  
はだしでかけまわる××子  
もさもさのかみをした××子  
しらみをとつてもらっている××子  
はなたらしの××子  
めやにをたまらせた××子  
あいぬのくちべにをした××子  
とこやとふろのきらいな××子  
どろんこであそぶ××子  
おとこのことあそぶ××子  
おとこのまえですかあとをひろげる××子

けんかばかりの××子  
だあれもない××子  
いつでもみつつの××子  
みょうじのかけない××子  
はくちの××子  
しょんぼりの××子  
でんしんばしらとなかよしの××子  
すわりこんでおとなをみつめている××子  
なきむしの××子  
はだしの××子  
はだかの××子  
消えてしまった××子

燐寸売りの少女に

たそがれ

凍えた手と凍えた心で

一本の燐寸を擦る僕

明るい世界を求めて……

火は汚れた雪を照らして

釜ヶ崎の一本百円也の燐寸より

早く消えて行く

僕の為の

明るい社会を創らずに

僕に暗い闇を突き付け

ばあっと点いた燐寸に

Nicotineの悪魔が棲む

恐ろしい谷間を見出す時

のみ

燐寸は淋しく

燃える

斜めに垂れ下がった氷柱に

燐寸売りの少女のように

母さんが云っていた愛の世界を求めて

硫黄の固まりに

誰からも顧みられない

心をそっと載せて

運命の一擦りを……

燐寸を擦れなくなった僕の

一点の明かりを灯せない僕の

口に啞えた

心の断片に

誰も灯は点けては呉れない

僕は散乱した光を眺めることしかできない

溝鼠の黒傷の世界の中を

土竜の掌で

人をかきわけ

燐寸売りの少女を探しに

僕の右手に

星一つ落として呉れる人を

探しに

ざくざくの中に

這って行く

片輪の僕は

湿った

一本の燐寸を

燐寸売りの少女の様に

暖炉のある人さらいの話に

暖かい火の灯った世界をもとめて

僕は

僕は擦っている

.....

僕に出来るのは

僕に許されたのは

燐寸売りの少女の様に

雪の中で

微笑んで死ぬ事だけ

裸足で

## 自然の中に

人混みの雑踏にいるより

独りで電信柱に寄り掛っていたい

ケーブルが硫黄を運ぶ

単調に単調に 出来るだけ単調に

硫黄泉の湯管を埋めた道を行く

湯煙が木管の割れ目から

硫黄臭を放つ

硫黄採掘場の女人夫は花をつけていない

硫黄は 自ら

鳥や虫を遠のけた

草と花を遠のけた

沼尻から安達太良への途上

僕は自由人であった

岩の上に立って放尿する

銀蠅がどこからからかやって来る

硫黄川が細く流れている

碧空に対して

黒い岩かべが天を突いてそびえる

犯されざる青の空

自然は犯されない

灰色の自然

僕は沼の平の

一つの石になっていた

## 昆虫

ヂクヂクと

七月は濡れていた

チクチクの中に

人は閉じ込められて行く

ぼやけた視界はまばたきする様に

薄い黄色におおわれる

眠っているうちに 肉のかたまりが

堅いきちん質の中でもがいていた

………

僕の話聞いてくれ

へギーギー

黒い又状突起が上下する

夏の山行きの話

ほら白い波頭の事

君がきのう話してくれたの

みんな憶えているよ

それなのに僕の話聞かない

君は僕を忘れたのかい

へギーギー

僕がおまがりをしてるって

僕は君と話がしたいんだ

へブルブル

羽根が震えているんだ

飛ぶ事が出来るんだ

だけど飛べるだけ事さ

飛んでも飛んでもお日様にはとどかない

自分で自分の足を踏んだり

足の調節がおかしいんだ

それで動きが鈍いんだよ

なにせ急に数がふえたんだから

………

あぶない

僕を踏みつけるな

人殺しだ

……

……

〈フウーン〉

いたいーガラスだ

僕を入れてくれ

〈バツ バツ〉

僕を捜しているの

僕を待っているの

――

――

窓をたたいているのがわからないの

……

みんなむだだよ

樹液を飲みたい樹液を飲みたい

黒い樹にへばりつきたい

黒い森の中に

僕の住処をつくろう

〈ボクハココニイルンダヨ〉

手紙

金沢は雨です

金沢はズクズクです

金沢は重いです

金沢は白痴になります

交通事故があります

煙草の煙あ肺で煙る様に

雨が煙っています

若者が奇声をあげます

老人が死んでいきます

金沢は年老いています

人々はうつ向いて歩かなければなりません

無理に胸を張ろうとします

と

頭が低い空に溶かされます

金沢は寒いです

もうすぐ雪が降ります

さようなら

追・故郷と同じです

### 尋問

詩を理解した記憶があったのか

詩を選んだ記憶があったのか

お前に

幼い記憶は何なのだ

大川橋の

たもとに捨てられた

子供だましが

お前の記憶か

わらび採りの

帰りに拾った

子供だましが

記憶なのか

長い髪に

黒ぶち眼鏡

エセコミュニスト

エセ詩人

おまけに

エセ人間

詩を

絵を

音楽を

何時

お前の脳裏に刻んだか

### 今日の僕に

今日の僕に

花を添えようとは思わない

何故って

花は枯れるから

菊の花びらの

一枚一枚落ちて行くは

指に

一本一本欠けて行くに等しいから

桜の花びらの

吹雪のように散るは

僕の心を白痴にしてみたいそうだから

僕の心に絵を

飾ろうとは思わない

「ゴッホの黄色」は

僕の黄色だから

「ゴッホの悲しみ」は

僕の○○だから

ダリの小腸で

街を歩くことが出来ないから

ラファエロの絵は

はる場所がないんです

一週間

鼻孔からコーヒーを飲む女とその恋人

月曜日

金曜日

苦いうがい薬或いは胃腸薬

切手のない封筒と宛名のない葉書

切れた電球のガラスの曇

ニガリを加えた紅茶を飲む山羊

火曜日

土曜日

なくした角を探している蝸牛

女が男を喰っている映画或いはテレビ

空白を読んでいる盲目

メチルアルコールを間違えて飲んだ男の話 26

水曜日

日曜日

壊れたネオンサインの宴

傘を忘れた青年を包んでいる袖のないダスター

一酸化炭素と茶匙一杯の砂糖

アスファルトが空にぶつかる物語

木曜日

と

煙草の煙が眼に沁みる野良犬

まつわりつくカンガルー

踊り

枯れた午後

二百五十人の中の一人は

窓が幸福

十字架の棧は

硝子への脅迫

硝子の風景画は

煙が踊っている

伴奏は北西の季節風

硝子への愛の為に

二百五十人中の一人は

十字刑を

打ち破る

「踊りは何で？」

タンゴ

硝子のギザギザを

伴奏に

時々

粉雪の伴奏

鉄の処女の

嫉妬は

「  
」

一つ石を拾い

平たい

地域を潰した

一つ石を拾い

楕円形の

潰した顔の

一つ石を拾い

水無き川の

陽に焼けた

一つ石を拾い

ケルンを積み上げる

### 或る饒舌家の死

一目、天麩羅と解る

黒い学生服の男は待っていた

灰色の

長方形のテーブルで

マッチ

しんせい

コーヒー皿と椀と灰皿

それとコーヒー

B.G.はNo.5

ズボンはキザなラップで

エセ ABGRY YOUNGMAN

訂正、B.G.は電子音楽を

ウェイトレスに

「やあ君、

現代の疎外を語ろうか」

エセ実存主義者の笑顔

赤いランプ

唇についたタバコの〇〇

唇をひきつる

「うまいコーヒーだね」

ついたての向うの

二人づれ

その又向うの

二人づれ

### 僕について

(一)

人々は流れる川で米を研いでいた

人々は流れる川で洗濯をしていた

人々は飲料水を求め一つの井戸にバケツを背負って

行った

山合いの町では水は出ない

掘っても掘っても水は出て来ない

水を求める穴は虚な心になっていた

赤い臭い水は心の虚を埋めはしない

人々は疲れた腰をあげて山を眺める

山は話さない

粘土の匂いのする町であった

荒っぽい職人の町であった

瀬戸焼窯はいつもけむりをあげていた

僕はそこで産まれた

戦争は未だ終わってなかった

「」

地方都市の夕暮れは侘びしい

青白い彼は

禿じじいの古本屋で

或る本を探していた

あるいは探している振りをして瞑想にふけていた

×××全集全十卷式阡円也

○○書簡集卷阡円也

雑誌どれでも五十円也

捨てられた、裏切られた本が第二の所有者を求め  
ていた

虚栄心の強い白痴な自称思想家、文学者の排泄物  
の悪臭が満ちていた

かまきり

かれたあきのひ

どんぐりのきもかきのきも

かまきりのこころもかれています

あきはさむい

かまきりもさむい

ただひとりのときも

ひゆるる ひゆるる

ないているすすき

かまきりは

かまで

すすきにすがりつく

さつりくのかまですがりつく

むかしのなかま

たれもかえてこない

のけもの のけもの

かぜがさけんでいる

のけものにされたかまきりの

かぜがくびをきつていく

さつりくのかまは

なみだでさびついた

さつりくのかまはこころせない

かぜがかまきりのこころをきつていく

こころをからしていく

かぜはつめたい

かまきりはなく

かまきりはしがみつく

すすきいはゆるる

なかまがくる

かまをもたげてくる

.....

なかまのためにしろう

なかまのためにしろう

ひゆるる

ふゆるる

ぼくのざんがいがかぜにとぶ

## 死んだ電車

雨の日、電車が緩い坂を歩いていた

その中に俺が乗っていた

昼であったか夜であったか

坂道のため、吊革が三次元に円錐形に揺れていた

男達と女達がい

実は俺を含めて乗っていたのか乗せられていたのか

無関係の鎖が俺と彼等を結びつけていた

鎖は重かった

が

それは防波堤であった

足と顔がセクスを区別していた

胸と性器ではなく

生きている或いは死んでいないを仮定に

電車は出発した

今は

乗客 運転手 車掌さえも

その仮定をかなぐり捨てていた

そして

途中乗車の俺には何の仮定も与えられなかった

車掌の眼は俺が無目的に乗ったのを知って責め

俺を下車させるために扇動していた

しかし

誰も電車が走っていくのに抵抗しなかった

むしろ乗客は俺を擁護している風であった

斜の向いの女は媚を売っている様にさえかんじられ

た

皆重い鎖の向うで

吐気に

俺は視線を窓に移した

坂道はすではない

車の外には何も無い

電車はどこも走っていない

しかし

ガタガタ何処かを走っている

風景が頭の中を流れる

女学校

デパート

アカシア並木

それを裏切つて窓の外には何も無い

“降ろしてくれ”

車掌は無視した

“俺を降ろしてくれ”

—電車が動いている—

初めて車掌が口を開いた

“オイ電車を止めろ”

“オイ電車を止めろ”

俺の握った金属棒の下で

運転手の脳漿が飛び散った

電車は止まらなかった

運転手は権力者でなかった

電車は動いている

女は性器を開いて俺を静めようとした

男は金で俺を静めようとした

—静かにしないと黄色の檻に入れるぞ—

ガタガタガタガタガタガタ

何処か或いは何処でもないところを

雨が静かに降っていた

俺は死んだ電車の完全乗客免許証を与えられた

### アタラシイ時代

ある手垢で汚れた午後

携帯マイクが

二十一世紀の革命を

唱う

学生は

拡声器に最敬礼を送る

ピラが

学生の顔を覆う

安保で女子学生が死んでから何年かたった

朝鮮での学生の死から何年かたった

ほこりだらけの広場に

学生の列

飢えを満たすための

道は灰色

樹々も灰色

学生も灰色

灰色のステッカーが

この砂利道に

ヴェトナムの農民が握った石と共通の石が転がって

るのだ

灰色の学生に

朝鮮の学生に流れた共通の血が流れるのだ

と

××団体の伴奏で  
唱い続けている

分裂主義者

トロッキスト

修正主義者

分裂主義者

トロッキスト

修正主義者

分裂主義者

トロッキスト

修正主義者

しんせいの煙が広場を包む

女の子が

灰色のパラソルの下で

へアリボンを結ぶ

自称マルキストが

ドラムをたたく

ガリ刷りのビラが

自動手渡機によって

砂利とほこりの花となる

革命家は誰で 誰が誰

誰が誰で 誰が誰

サツとさわやか

コカ・コーラ

## 白痴へ

きみはわられたね

それはきかないなこういなんだよ

きみははしつても

さけんでも

きみはないてしかいないんだよ

みずたまりの

みずに

すがたがうつつても

きたないみずなんだよ

おばけがはしつていと

いうからへんなんだ

ろうのおめんをかぶつていと

いうからへんなんだ

だまつていと

たれもわらわないよ

## 玩具への讃歌

都会の若者達は

農村の若者達は

白い手で

黒い手で

玩具を捨てて行く

騒音の地下現場工事へ

不毛の開墾地の茨の陰へ

黒い肉体労働者が拾いに来るか

混血の私生児が拾いに来るか

誰も知らない

縁なし眼鏡のインターが

玩具を知らない少年が

踏みつけに来る

青白い少年が玩具潰しの研究をする

本の細胞群に囲まれて

若者達は

玩具を造り続けている

玩具の部屋で生活を営みながら

青年達は

耕運機で玩具を掘り当てる

玩具は地下水が浸みだす様に現れる

そして

白い手、黒い手が赤い手に変色する頃

若者達の 青年達の

穴という穴から

細胞と云う細胞の隙間から

玩具が

石鹼の泡の様に

ブクブクブクブクと湧いて来る

一青年が

玩具の重さに耐えかね

うずくまろうとする時

若者達は鞭を打ち

一青年を台座に載せた

青年は台座の上で

口に玩具を詰めたまま

玩具になった

隠れん坊の話

鬼は誰だったか憶えてなかった

僕は縁の下に隠れ

タッチして鬼を鬼にしてやろうと

期待に脹らんでいた

僧良寛の様に眠っているのではなく

期待に眼を輝かせて

暗い縁の下で

腹ばいに笑いを堪えていた

空は曇ったまま

鬼が遠くで

ひたひたと歩いていく

ひたひたと遠ざかって行った

誇りで汚れた

僕が出て行くと

見知らぬ大人達が煙草を喫って会話をしている

見知らぬ女が子供をあやしている

鬼は僕を探しに来なかった

銀杏の木の下に隠れた安夫はどうしたのだろう

納屋に隠れた一郎はどうしたのだろう

あの土手の下に隠れた敏夫はどうしたのだろう

安夫が銀杏の陰からニヤツと顔を見せた

駆けて行ってみると安夫はいなかった

納屋の窓から一郎が人差指でシートと合図した

オイツと声を掛けて行って見ると誰もいなかった

土手の上に黙って顔を見せた敏夫の所へ行くと

川がいつもの様に流れてるだけだった

鬼が何故僕を探してくれなかったのか

ひたひたと足音を立てて何処へ行ってしま

たのだらう

大人達が黙って通り過ぎて行った

空は

どんより曇ったままだった

ヤスオチャーチャン

僕が安夫の家に行く

背中の曲がった安夫の母が顔を出した

ウチノヤスオハヒトサライニサラワレタダヨ

眼を赤くして云った

一郎の家へ行く

一郎の父が目を剥いて云った

イチローハトウキョウサイツタゾ

トシオクーン

敏夫の家へ行く

女の子が出て来て

ニイチャンシンダ

しゃくり上げてやっと話した

鬼の家へ行く

別の人が住んでいた

曇った空は

なかなか暮れなかった

### ヤングゲネレーションのための一節

「若い世代」

この言葉が美しい感動だったのは何時だったか

「学生達」

この言葉が力強かったのは何時だったのか

× × ×

乳瓶より未だ小さい瓶の中で

瓶と

猥談に耽る

性的未経験者達

長方形の二次元の

痴的な吉永小百合の微笑に

自慰に没頭する高校生

× × ×

ミナハイール錠 百二十円

× × ×

ハイライトの

煙の中に

ビールの

一粒の気泡の中に

自己の拡大された映像を求める

老いたる青年

Cターンに備えられた

凸面鏡に怒る

風俗ビートジェネレーション

× × ×

腺病質の子供達

さあビタミン注射の時間です

その白い腕では

働けません

× × ×

最後に感動に値する次の詩を送ります

「プリユメール」

そこにみにくさがあった

アメリカ革命にあったように

フランス革命にもあったように

人間のみにくさがある

そこには悲惨さがある

しかし

よりひたむきな清純さが

自由以上に自由を求めめる心が

そこにはある

こんな風に私は想う

### 日本の若い心

彼が産まれたのは天皇制崩壊の予感の時代であつ

た

夜

南方支那で飢えた狼の遠吠えの夜

陣痛の呻きに

彼は産まれた

平然と

皺苦茶な手と

原人の顔貌を持って

偽善家の産婆と

母と

青白の天皇制の奴隷達が

祝福を与えた

彼と

彼の他人達の全てに

時代の製品 彼は

原人の顔貌を持つ以前から

ある一つの狂った幻影を

絶対性を備えて

彼の肩に背負わされていた

糞禍の現実社会で

直径数ミリの骨には

重過ぎる

天皇制の幻影を背負わされていた

幻影社会の首領達は

幻想社会を強制していた

彼は顔中 血まみれにして

夜となく 昼となく

天皇制の顔貌に変える事にぼつとさせられていた

泣きながら笑いながら

或る者は死にながら

八・一五の奴隷解放の日まで

以後にも

瘡高い声が自分自身に野良犬の宣言をする日まで

次の日から

エセ自由主義者達が現れた

碧空に

首を締める真綿の様な白い尾を引いて

〇〇の幻影が天皇制の幻影を覆っていた

薄汚れた木造家屋に

家鼠に代わって溝鼠が人間襲うのだ

疲れた曇空に

結核に代わって癌が人間を虫食むのだ

グドモオニンググドバイ

ゲイシャガアルパンパン

彼が何故

強姦ヤンキーの幻影を背負わなくてはならないのか

にやけた女誑の前に

贖造自由の下に

星条旗の下

何故笑みを送らなければならない

彼は

疑北台に向う種牛なのか

人間の彼は何処に行ったのか

日本の砂漠は果しない

幻影社会で砂漠を埋めつせない

日の丸と

星条旗と

微笑とで

エセ人間は

鞭打つ

又、新しい呪文を唱えて……が

マゾヒストでさえ耐えられぬ苦しみの中で

彼も一人

幻影の旗でなく

紅く燃える彼自身の旗を

砂漠の片隅に掲げようとしている

現実社会の分子として

砂漠の砂粒を数えている

彼は

未だその端を掲げていない

ただ

幻影の重みを

顔を歪めて

ちっと感じているだけなのだ

重い 痛い……

二十世紀の若者は

幻影を背負わされたまま

ちっと屈み込んでいるのだ

太平洋の北西に

鞭打たれ弓なりになった

日本列島に

果して

夜明けが来るのか

あの真紅に

うねり行く山なみは

何時

真に記憶されるのか

その若い心に

今日も

輝いている伝説の空

異常体質

産まれたのが

重い空気の垂れ込める

地方の

空に押されて

つぶれかかった

板葺きの家だったせいか

裏山の急斜面から流れる

腐った草、葉の悪臭のせいか

お前は

太陽アレルギーになった

その皮膚は

気絶する様を青空の

燦々と輝ける太陽に

魚の住まぬ

沼が

メタンガスを

放つ様に

ブツブツと

湿疹を作る

泡つくと斑点は

額の生え際から

白いシャツの襟まで

アフリカが黒人で埋められてる様に

とび出た部分は

ブツブツで埋まっている

燦々たる太陽を

避けて

夜

行動する

お前

人間の顔と

その張り切った

胸を見るのではなく

そっと

洗い残した

垢だらけの背から

探って行く

人類の栄光の道を

仰ぐのではなくして

腐った

過去の

裏切りと血と泥の中を

這いずり廻って行く

お前の母は

みにくかった

その腐敗した子宮から

お前が産まれた

母に対する恨みを

恨み返そうとして

お前は

唾の子を産もうとしている

恨みを恨み返し

次に又

恨みを恨み返し地平線の彼方まで恨みを恨み返して行

く

## 裏山

木枯吹くと

あれは次郎の

お母の声だ

木枯吹くと

あれは三郎の

お母の声だ

裏山に

枯枝が

かさかさなって

かさかさ

何処までも響いて行く

次郎

三郎は

ごくつぶし

四郎

五郎も

ごくつぶし

ごくつぶしは捨てる

裏山に捨てる

せめて

女の子なら

人買いに売ったものを

お母

泣く泣く

次郎捨てに行け

お母

泣く泣く

三郎捨てに行け

野郎しか

産めぬお母は

馬鹿女

泣く泣く

捨てに行く

子を捨てに行け

春には

山から

花の香が

夏には

ムシムシ

草の香が

秋には

枯葉が

飛んで来る

カサカサカサカサカサカサ

カサカサカサ

拾ってくれや

隣村の

市兵衛さん

拾ってくれや

吾助さん

育ててくれよ

次郎

三郎

捨てた子供を

誰が拾おうか

市兵衛も

吾助も

誰も拾わぬ

誰も拾うまい

ごくつぶし

春には

花の香

流れ来て

夏には

草の香

ムンムンと

秋には

枯葉が

カサカサカサ

産婦人科大繁盛

### 永い宿題

ヒトと話す度に

本の一頁をめぐる度に

出された宿題を持ったまま

俺は

二十二歳になってしまった

キンダーブックの片隅に

走り書きされた××子

猥雑な落書を締めくくる



ジャンケンポン、ジャンケンポン、ジャンケンポン

へラ、ハサ、コブ、ハサ、コブ

負け、負け

鬼ごっこし

そのまま何処かへ逃げてしまった○○夫

旋盤で切られた指を

探す事に情熱を傾け

本の一頁を

なくなつた指でめくろうとする青年

## 最後の詩

「エエ、では宿題はここからです。」

十年間、同じ冗談を言い続けた教授からの

宿題

種々雑多な宿題が

積み重ねられた

宿題の為の宿題

宿題とは何かという宿題

もつと早く

宿題を成し得なかった敗残者により

至るところに傷つけられた

机に向かわねばならなかった

——俺は

更に付け加えられつつある

永い宿題のために

顔を洗い

ふと

窓を覗いた時

そこに

雪原が広がっていた

僕等はこの

処女を

越える事が出来なかった

いたずらに

汚れた

足跡を残しただけだった

黒い大地を

覆い隠し

どんよりした空と

つながった

世代の雪原

黒い大地が

雪の下から

泥土になって

現れる前に

越さねばならなかったのだ

すでに

僕等は

雪が融けた時

泥土に埋まって行くしかないだろう

「西経八十の島々を

西インド諸島と名付けた

コロンスの真似はしなくて済んだ。」

この老いたる青年の言葉を

しんせいの煙を吐き乍ら

呟くしかないのだ

融け始めた雪原を前にして

もはや

僕等は

あの空と節減を

わかつ

記念碑を建てる事が出来ないのだ

オマエノ眼玉わドコニアル

かたつむりは歩く

心の底辺を

はるかなる地平線を

ここはどこですか

あれはなんですか

人間の荒み

淡い雪の雫

かたつむりがなめる

煤煙で汚れた雪の雫をなめる

そしてかたつむりは

翔ぶ